

図書だより

第49号
平成22年2月1日
呉工業高等専門学校
教育センター図書館
<http://www.lib.kure-nct.ac.jp>



美術館通り

目 次

・ 巻頭文	Critical Reading	校長 遠藤 一太	2
	図書館も変わっています	図書館長 笠井 聖二	3
・ 第6回校内読書感想文コンクール			
最優秀賞			
「ビタミンF」(重松 清 著)	E 1	砂田 真紀	4
「博士の愛した数式」(小川洋子 著)	M 2	小林 達哉	5
「原爆体験 六七四四人・死と生の証言」(濱谷正晴 著)	M 3	中川 祐樹	6
「藤壺」(瀬戸内寂聴 著)	C 4	堀本 遥	7
優秀賞			
1年生の部	C 大迫 拓馬 C 松岡 昌宏 A 高木 涼子 A 三好 美咲	8	
2年生の部	M 深栖 亮介 E 本計 貴紀 C 貝原 健太郎 A 幸田 進之介	10	
3年生の部	M 大廻 勇人 M 木戸 志紀 C 大崎 直生 A 小林 香菜	13	
4・5年生及び専攻科生の部	A 4 末重 麻衣 S 2 小早川 誉博 E 4 舛本 華	16	
・ 留学生が紹介する外国の図書館			
私の街の図書館	E 3	フック	19
ビエンチャン大学(ラオス)の図書館	C 3	ケオサワーン	19
・ 行事報告 第6回ブックハンティング		教育センター長補 原本 博史	20
・ 新任教員の随想			
本が見せてくれた私の興味の原点	人文科学系分野	新家 百合	21
私の読書体験について	自然科学系分野	松橋 栄市	22
「本」の中にもあった人生への解	環境都市工学分野	竹内 準一	23
苦手な読書が趣味	環境都市工学分野	三村 陽一	24
テーマが拡大していく読書の楽しみ	建築学分野	泉 洋輔	25
ことばを楽しむ 一詩と携帯メール	建築学分野	佐々木 伸子	26
・ お知らせ		図書館	27
平成20年度 図書館利用状況			
図書貸し出し回数上位10			
学年末休業中の長期貸出について			
・ 編集後記		図書館	28

巻頭文

Critical Reading

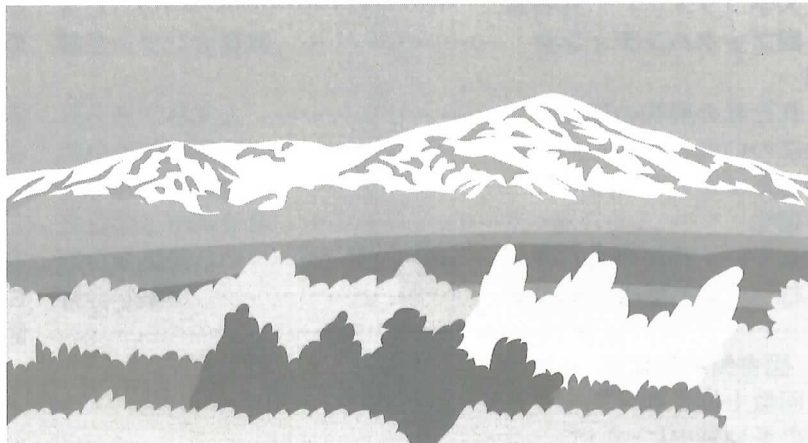
校長 遠藤 一太



「おや？これは何のことだろう。」と思ったとき、まずは良く考えてみる。それから人に尋ねたり本で調べたりして、頭をひねった後ようやく満足のいく答えにたどり着くのが昔流の情報検索でした。今はインターネット検索で、世界中の奇人たちが発信している情報を瞬時に手に入れることができるようになりました。しかし、どれが正しいかをどのようにして判断すればよいのでしょうか。多くの人が同じような見解を書き込んでいるからといって、それが正確な情報を伝えているとは限りません。

学校の図書館は学習や研究の参考になる資料や、文芸小説など様々な本を提供しています。著者たちは、それぞれの人生を歩んできた人間です。小説にも技術解説書にも著者の個人的価値観がにじみ出てしまいます。また、わざとひねった逆説的表現や誤った内容が含まれていることもあります。

呉高専図書館は平成21年度より情報処理センターと統合された情報センターの図書館としてリニューアルしました。学生諸君が、いろいろな形態の情報に主体的にアクセスすることで、書かれていることを鵜呑みにしない、批判的読書や賢い情報検索ができる人になることを期待しています。



図書館も変わっています

図書館長 笠井聖二



今、図書館は、少しずつですが変わろうとしています。皆さんは、図書館の変化に気がついておられるでしょうか。

まずは、目に見える変化から。図書館に、新しい部屋（閲覧室）ができました。階段を上がって左手の、ガラス張りの部屋です。工事は、10月に終わりましたが、書架の整備などに時間がかかり、実際の利用は3月中旬以降になります。新しい閲覧室ができたことにより、現在より約1万冊も多くの図書を展示できるようになりました。これまで、回転式の書架で文庫本を探すのが大変だったと思いますが、横に広い書架に変更しますので、他の本と同じようにゆっくりと本を眺めながら、文庫本を探すことができるようになります。また、手狭であったパソコンコーナーを、新しい閲覧室に移動し、パソコンも約20台に増設の予定です。新閲覧室の整備により、図書の保管・閲覧という図書館としての基本的な機能と、学生の皆さんの多様な学習活動を支援する新しい学習環境の充実を進めることができました。

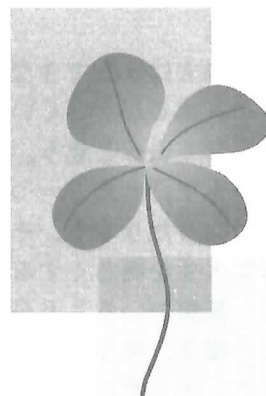
次は、目に見えにくい変化です。図書館に関する活動のやり方を変えました。

例えば、この「図書だより」にも掲載されている「校内読書感想文コンクール」を、審査員と図書館関係者で実行委員会を組織し、実施する方法に変更しました。これにより、読書感想文コンクールを盛り上げる工夫や行動を取りやすくなりました。今年は、初めてのことで、実行委員会が十分に機能したとは言えない部分もありましたが、優秀な作品を図書館で展示をしたり、少しですが賞も増やしたりすることができました。これらは、成果のひとつといえます。

図書の整備方法も、変更しました。図書館では、利用者である学生の皆さんからの希望や、「こんな本を学生に読んでほしい」という先生方からの推薦などにより、購入する図書を決めています。先生方からの推薦では、新任の先生から多くの推

薦を受ける傾向がありました。呉高専に新しく来られ、関係する図書の不足を実感されてのことと思います。そこで、新任の先生に別枠で図書の推薦をお願いし、新しい視点からの図書の充実も進めることにしました。また、図書の購入では、どうしても分野のバランスを考えます。このことも重要なのですが、ある意味で、図書を購入するうえでの制限ともいえます。そのために、購入が難しかった本もあったと思います。そこで、全分野の図書の基本的な整備とあわせ、年ごとに重点分野を設け図書を充実していくことにしました。今年は、機械工学分野と人文社会系分野の図書の充実をおこないました。今後3年間で、全分野の図書の充実を目指しています。

図書館では、「整備」という目に見える変化だけではなく、「質」としての目に見えない変化を大切にしています。「最近、図書館にいる時間がふえたな」、「何か、図書館の雰囲気が変わったな」という形で図書館の変化に気づいて頂けると、嬉しい限りです。そして、この変化の結果として、図書館が、学校内の「学習活動の中心」となり、更に、地域の「知の活動拠点」となればと考えています。



第6回 校内読書感想文コンクール最優秀賞

1年生の部

ビタミンF

重松 清 著



電気情報工学科1年 砂田真紀

今の十六の私達からすれば、三十七～四十の男の人はどのような存在なのだろうか。中年にもうすぐなるおじさんといったところだろうか。つまり三十七～四十歳はとても微妙な年齢だと私は思う。

この本は、重松清さんから三十七～四十歳の人生の“中途半端”な時期に差し掛かった人達に贈るエール。主人公は、三十七～四十歳の男の人である短編七編で構成されている。Family (家族), Father (父親), Fight (ファイト), Fragile (もろい), Fortune (人生) … 〈F〉で始まるさまざまな言葉を、個々の作品のキーワードとして物語に埋め込んだようだ。

私は、この本の七編の中でも「ゲンコツ」という話が最も印象に残った。三十八歳の雅夫の日々である。ある時の同期の吉岡との会話である。

吉岡が、

「中途半端だよな、三十七、八って」と言う。

「うん…」

「俺は『まだ』だと思ってるし、おまえはどうせ『もう』なんだろう？」

この吉岡の言葉に雅夫は反論できなかった。私は、この雅夫のシケタ感じがすごくいやだ。人生を楽しんでなく損をしていると思う。逆に私は、吉岡の前向きさが好きだ。考え方一つで人生が暗くなったり、明るくなったりする。それなら、前向きな考えを持って人生を明るくすることが一番だと思う。そして、笑顔でいることがすごく大事だと私は思う。私の場合、笑うと元気パワーが蓄えられる感じがする。そして、楽しい気分になれる。要は、笑顔が人生の楽しさをくれるんだと思う。私は、雅夫のように三十七になっても『まだ

三十七か』と思える楽しい人生を送りたい。

この本では、三十七～四十歳が中途半端な年齢とあったけど、今の私の十六歳も何とも言えない年齢だと思う。子供とも言えないけど、大人でもない。というか、私は子供だと思いたくない。そこで、親に聞いてみた。

「十六歳って子供なん？」

『知らんわ』

親がこう言う時は自分でもよく分からない時である。私なりの子供の定義は、義務教育である中学生までの人である。そして大人の定義は一人で生きていける人である。やっぱり、私の十六歳はどちらにも当てはまらない。親のおかげで高専に行けてるし、飢え死にせず済んでいる。友達のおかげで、さびしくなく楽しく過ごしている。今の私は、確実に大人ではない。

これを今、書きながら思ったけど、一人で生きていける人はいないと思う。助け合って共に生きていける世界だと思った。ということは、私の定義によればこの世界に大人はいない。すごく変だけどそれは私の考え方である。とにかく、子供でもなく大人でもない今を楽しみたい。これから先もずっと前向きに笑顔で過ごしていく！！



2年生の部

博士の愛した数式

小川 洋子 著



機械工学科2年 小林 達哉

私は愛という言葉の意味を深いところまでは理解できていない。原因があるとすれば、これまで培ってきた恋愛経験が全くの皆無であることだろう。しかし、そんな私であっても愛が様々な形で存在することは知っていた。映画や小説などの多くの作品には、少なからず一つくらいは誰かの愛がある。ただ、そのほとんどは特定の個人に向けられているのだ。平等とはほど遠い、というのが愛だった。私は恋愛についてはともかく、相手に伝えたい感情はある。喜怒哀楽から派生する多様な感情は、やはり誰かに気付いてもらいたい。

それは特定の誰かではなく、周りのみんなである。私はより多くの人と共感したい。できれば、その感情は「楽」であり、願わくば周囲の人間に優しさを振りまける人間でありたい。私のこの感情は愛とは異なるものだろうか、自分自身には判断ができないでいる。

私が愛について考え、慈しむ心を誰かに贈りたいと思えたのは、「博士の愛した数式」における「無償の愛」という言葉に起因する。まず、そのあらすじを述べておこう。

家政婦の「私」はある大学の数学教授宅に派遣される。「私」はその人を博士と呼び、博士の子供を独りにしてはならないという計らいによって「私」の息子も勤務中は招き入れることになる。博士は息子を「ルート」と呼んだ。博士の記憶は八十分しか持続せず、土日以外は毎日顔を見る「私」でさえ一日が終われば初対面からやり直しだった。博士は「私」に対して酷く淡泊だったが「私」に関する数字には興味を見せ、どれほど偉大な数であるかを語り聞かせた。博士は数式を愛していると同じくらい子供を愛していた。ルートが怪我をすれば心底心配し、ルートが算数の問題が解けないと博士は何よりもそれを優先した。ルートの誕生日、手違いから博士はケーキを崩してしまい混乱した博士はふさぎこみ、八十分の記憶が壊れてしまう。唐突に、三人の生活は終わってしまった。

博士の捧げた無償の愛について二つの感想があ

る。

一つは、博士が「私」やルートに対し、数の性質に関して質問してどのような答えであれ尊重し、真理に近づく者は数と同等に誉め称えたことにある。博士は人を誉める時、何度か数式で例えている。博士にとって最大の美は数字の世界であり、感情を最大限に表現できる数という形をとったことが、私には衝撃だった。

私は昔から、人に物事を伝えることが苦手だった。

言葉にすることが下手で状況説明はおろか対応さえもまともにできた試しさえない。しかし、博士の自分にしか伝わらない表現でも、形にすれば深い意味をもってくると気づかされた。過去に面接でパニックに陥った際も、口ごもらずに形にさえできていたら結果は変わっていたかもしれないと後悔している。

二つ目は、博士の言動を正確に捉え、一個人として正当な評価を下した「私」にある。

彼女は一見理解できそうにない博士の言葉にも真摯に耳を傾け、博士の陰ながら数を通して他人を理解しようとする努力を見出した。彼女の人の気持ちを察する思慮深さと真意に迫る積極性は、博士にとっても対等な立場で語り合える貴重な人物だったに違いない。

私自身、自分の気持ちは相手が気づいてくれるくらいでしか伝える手段はなく、自分から理解を示してくれる人がいると心強かった。

「私」のような人は今の世の中には必要だ。深刻化するいじめの現状はその最たるものだろう。いじめられる人間は何かを訴えている。それは言葉ではないかもしれないし、言葉であっても全く違うことかもしれない。もしかしたら本人は自覚していない可能性もある。そういう人達の意味を確認し、助長し、救済するには彼女のような理解力のある人が必要となるのではないだろうか。

無償の愛は送り手と受け手の双方の努力によって為されている。二つの努力を私も心懸ければ真意を人に託すことができるだろうか。

3年生の部

原爆体験 六七四四人・死と生の証言

濱谷 正晴 著

機械工学科3年 中川 祐 樹



一九四五年八月六日に広島、九日には長崎に原爆が落とされた。多くの死者が出てしまった原爆を知らない人はいないだろう。日本では原爆を再現したドラマや映画が数多くある。実際に何度か見たことがあるが、それを越えた事実と恐怖をこの本を読んで感じた。

この本は、原爆の状況や被害者の死亡時期、年齢、人数などを細かく表やグラフで表されており、そこに被爆者の思い、著者の考えが綴られている。この本の中に被爆者の苦しみが強烈に伝わってくる文が二つあった。

一つは〈原爆は人間として死ぬことも、人間として生きることも許されなかった〉という一文。

原爆が人間に何を与えたか、ひしひしと伝わってくる。

本来の人間の死に方、生き方を原爆によって否定されてしまった。

被爆者が生きる上での不安もたくさんある。

具合が悪くなると、原爆のせいではないかと思う不安や、原爆の出来事が、深く心の傷になったこと、子供を産むことなど、自分の身体に関することだ。

健康でなくなってしまうとは、常に原爆が頭から離れない。

被爆後の生活も長くにわたり苦しめている。

一瞬の出来事だった原爆も、彼らにとっては一生心の中で続いているのかもしれない。

二つ目は〈被爆者の苦しみは「被爆者であること」それ自体です〉という被爆者の意見だ。

最初はよく分からない一文だったが、少し考えて納得した。

被爆者にとって、自分の健康を原爆によって蝕まれる事や、心に深く傷を負ってしまう苦しさもあるが、それら以上に一番の苦しみとなっているのが「自分が被爆者である」と感じ、認めなくてはいけない事だったのだ。

痛苦とともに、そこには、憤りがこもっている。

これこそが、原爆体験をしていない私達の想像

を絶するほどの苦しみだった。

そもそも、今の時代にこうして詳しく原爆の資料や情報が残っているのは、被爆者の体験談に他ならない。

「自分が被爆者である」苦しみを耐えてまで、こうして原爆が語り継がれ、解明されてきた。

そこまでして原爆を伝えてきた意味。それはもう二度と原爆が起きてはいけないという訴えだと思ふ。

だから原爆当時を思い返し、重い口を開いてくれるのだ。

しかし、原爆から今年で六十四年になる。

当時二十歳だった人でも八十四歳になる。

次の世代、また次の世代と生の声で伝えていくのには限界がある。

もし伝えなかったとしたら、誰も原爆の恐怖が分からなくなってしまう。

そこで誰が次の世代に伝えなくてはいけないのか。

子供の時からおじいちゃんやおばあちゃん、たくさん人から実際の話聞いてきた私達だ。

直接聞いた生々しい体験と、感じた恐ろしさをそのまま伝えていきたい。

実際に体験をしたわけではないので、深くは語れないが、原爆の恐ろしさを伝えるだけで十分価値のあることだと思う。

原爆のことを話すということは、私達に原爆の恐怖を伝えるのはもちろん、今聞いた話をたくさんの人に伝えて欲しい願いが込められているのだと思う。

だから、私が大人になったら、原爆の恐怖、原爆が与える苦しさ、次の世代にも伝えて欲しい思いを込めて、子供達に伝えていきたい。

この本を読んで原爆のことや被爆者のそのままの思いを知ることができた。

原爆の犠牲者を二度と出してはいけないと思った一冊だった。

4・5年生及び専攻科生の部

藤 壺

瀬戸内 寂聴 著



環境都市工学科4年 堀本 遙

今、あなたの“生きがい”は何ですか？と、問われた時、あなたは胸を張って答えることができるだろうか。様々な情報が行き来する現代社会で、何に惑わされることなく、一つのものに向かっていく人はいったいどのくらいいるのだろうか。源氏は、十二歳にして、左大臣家の姫君と結婚されたにもかかわらず、義母であるとても美しい藤壺に切ない恋心を募らせていく。

許されぬ愛に、自分の人生を捨てても貫こうとする源氏の真っ直ぐな思いに“生きがい”という言葉が当てはまるのではないだろうか。しかし、自分の人生を捨てても大切にしたいもの“生きがい”というのはどのようなものなのであろうか。

私の生きがい…ただひたすら毎日を精一杯生き、全く想像のつかない未来に向かって足踏みしている状態というのが、今、最もな解答である。将来という言葉に日々ビクビクし、答えの出ない自分の心に呆れ果て、どこに向かって進めばいいのか、ただひたすらに大人への入口を探している。そんな最中、この本に出逢った。最初はただ単に、授業で「藤壺」に少し触れた時、源氏と藤壺の行方が少し気になっていた程度で読み始めたが、こんなに衝撃を受けるとは思ってもみなかった。今一番私が大切にしたいのは何かということ。努力もしていないのに、最初から諦めて、自分の気持ちから逃げていたということ。そして、自分の気持ちに素直に生きろということ。平安時代の十二歳の成年が訴えてきた。何もかもから逃げようとしていた私の弱い心に、食い入るように、そして、静かに叱るようにミシミシと分け入ってきた。どこに進めばいいのか全く見当のつかない真っ暗な迷路に、光を注ぎこんでくれた。「素直に生きろ」という一筋の光を。私は、小さい頃から、姉と比べられて、出来ない自分が格好悪くて、それを認

めるのが怖くて様々なことから逃げていた。進路のことも、「大学に行きたい」と言うと、また馬鹿にされると思い、自分の本心を打ち明けられずにいた。しかし、この本を読んで、すごく勇気が湧いてきた。自分の気持ちに正直に生き、強く願えば、どんなことでも成し遂げられるのではないかとさえ思った。

それに、今は、本心を打ち明けて、それに向かって努力することこそ、私の胸を張って言えること“生きがい”なのではないだろうか。

“生きがい”という言葉を辞書で引いてみた。「生きるに値するもの。生きていく張り合いや喜び。」

源氏の“生きがい”それは、自分の気持ちに正直に、人生を懸けて一人の女性を愛し抜くことであったように、私の“生きがい”は今、自分の気持ちに正直に、夢に向かって努力することである。私はまだ、源氏のように生涯一つのものを貫き通せるほどの大切な一つのものに出逢っていない。しかし、今出逢っている、一瞬一瞬の“生きがい”を大切に、私の生き方で私の人生を正直に歩んでいきたい。きっとそれは、一つの大切なものに通じる一つ一つのヒントであると信じたい。

“生きがい”それは、生きるということ。それは、幸福に必ず結びつく赤い糸である。



優 秀 賞

1年生の部

空中ブランコ

奥田 英朗 著

環境都市工学科1年 大迫拓馬

悩みというものは誰でも心に抱えている。それは、身体的な事や心情的なこと、自分の能力や将来に対する不安や人間関係など、人によって抱えている悩みは様々である。また、その悩みを苦しめ、自ら命を絶っていく人もいるこの世の中で悩みというのは人間に常についてまわる事となった。ただ、その悩みのおかげで成長する人間もいれば、自分を見失って落ちこぼれていく人間もいるのが現実である。

この本の中には、短編小説が5つ収録されており、それぞれの主人公が人には言えないような悩みを抱えている。その悩みとして空中ブランコが飛べなくなったサーカス団員、尖った物が怖いやぐざ、妻のお義父さんのカツラを無性に取りたくなる脅迫神経病など、様々である。この物語で共通している事として、どの主人公もある程度キャリアを持ったベテランであるという事、それが故だれにも相談できず、伊良部という精神科医に治療を依頼する。そして、その伊良部がはちゃめちやであるが、悩みを克服させていくのが本のあらすじであろうか。

その伊良部の治療法であるが、まず何でも自分から実践しているのだ。話を聞くだけではなく、身をもって主人公たちと同じ事をしている。出来るわけなのに・・・と主人公は脳天気な伊良部に心を開いていき、信頼関係というものを誕生させている。いつしか、伊良部に何でも話せるようになり、心にゆとりが出来ることによって、悩みと正面から向き合うことが出来るのである。短編小説の中に『義父のヅラ』という話がある。この話は医者である達郎が、義父であり、病院のトップである栄介のカツラを取りたくて仕方がないという悩みを抱えていた。そんな達郎に言った伊良部の一言がある。

「とにかく羽目を外すこと。童心に帰ること」

この発言は僕に今までなかった考えをくれた。人間というものは社会の常識の中で生活している。人に迷惑をかけない、物をこわしたりいたずらしてはならないと、小さい頃から言われてきたことだし、この先変わることもないだろう。ただ、自

分は素直に生きているかと問われた時に、果たして「はい」と自身を持って答えることは出来ない。自分は人に物事をはっきり言えない所がある。周りに合わせて、流されることも少なくない。社会の常識を守ってはいるが、自分に正直ではない。そんな自分が嫌いだった。この伊良部の発言は一見ふざけているようだが、自分に素直に生きている証拠なのかも知れない。人に迷惑をかけないのではなく、人は人に迷惑をかけて成り立っている存在なのだ。一度自分も、なりふりかまわずためこんだ感情をはき出すべきなのだろうか。本当の信頼関係を築けている仲間なら、僕を理解した上でいったいどんな言葉をかけてくれるのだろうか。答えはわからない。ただ、自分に正直に生きていこうと思う。

テロリストのパラソル

藤原 伊織 著

環境都市工学科1年 松岡昌宏

僕はこの本を読んで、人間の弱さというものを感じた。心が弱い人間はたくさんいるだろう。嫉妬で人を憎んだり、自分を苦しめた者に復讐しようとしたり・・・いや、むしろそんな弱さはどんな人にもあると考えるほうが正しいのかも知れない。

僕だって、わかっている。時々、自分の弱さを痛感することがある。「今のは、自分が間違っていた」と思いながら、相手に腹を立てる。それは、明らかに自分の弱さだ。

「殺むるときも かならずらむか テロリスト
蒼きパラソル くるくる回すよ」

この本に出てくる自由短歌の一つだ。意味がわからなかったので調べてみた。「殺す時もこのようにするのかテロリスト、蒼いパラソルをくるくる回すように」

20年あまりの歳月で、嫉妬や憎しみによってテロリストに変貌してしまった人間が、この本には登場する。

菊池俊彦と園堂優子と桑野誠の3人は、かつて大学闘争を戦った中の一員だった。闘争から身を引いたのち、菊池と優子は3ヶ月の間同居していた。一方、桑野は闘争時代から優子に惹かれていた。菊池と桑野は、互いに心が通じ合う友人だった。しかし、優子の気持ちは菊池にあるというこ

とを、桑野はすでに気づいていたのだった。

それから約半年後、優秀だった桑野は、フランスへ留学した。しかし、新しい世界を目の前にした彼の胸に、闘争時代の余熱がぶり返してきた。彼は左翼ゲリラとの接触ができ、いつしかテロリストになってしまったのだった。彼は名前を変えて渡米した。

そのころ優子は、ニューヨークで通訳の仕事をしていて、それがあつた時、偶然桑野と出会い、それからたびたび彼と会うようになった。だがしかし、桑野は人殺しのプロになってしまつてた。前の短歌は優子が彼のことを詠んだ詩だつたのだ。「もう決して取り戻せないものは、破壊する。そういうことさ。そんな人間になつてしまつたんだよ、ぼくは」大学闘争から22年の月日が流れ、桑野は優子さえも殺してしまつたのだった。

憎悪や嫉妬の心は、人間ならだれにだってあるものだ。どこかでそれをストップさせなければ、没落が止まることはない。桑野は、国にさえ復讐しようとしていた。弱い心が彼をそうさせたのだと思う。菊池に対する嫉妬、そして対抗心の芽生え。

今になつて、あらためて考えてみた。全てを自分の思いどおりにしたいなんて、あまりにも身勝手だ。一方、何一つ自分の目的をかなえられない人生なんて、それは辛すぎるだろう。では、自分はどう生きていけば良いのだろうか。相手を思いやつて？ 自分の夢を持つて？ 今、心の中で葛藤が起きている。この作品を読んで、欲望の最果てが少し見えた気がする。自分の「信念」は、まだあやふやなままだが、機会があれば、もっとたくさんのことを考えてみたいと思う。

空中ブランコ

奥田 英朗 著

建築学科1年 高木 涼子

私はこの本を読んで、人の魅力について考えた。物語は、自分が失敗しているのに気付かず人を責めるサーカス団員や、尖端恐怖症のやくざ、一塁にうまく送球できないプロ野球選手が、悩んで困り果てて精神科を訪れると、とても医者とは思えない「伊良部」という医者がいて、患者の病気を直接治療しないで、それぞれの患者の職業を自分でもやってみて、患者も分からないうちに、伊良部から何かを学び、病気を治す術を見つけるというものだ。

伊良部は、変で頼りない感じがする医者だけど、

病気の相談に来た患者のうち全員の病気を治して、また頑張つていこうという気持ちにさせている。私はこの物語を読んでいるうちに患者が病院に来てから帰るまでの間に、気持ちの変化があることに気がつた。どの患者も始めは、伊良部の変人ぶりに、「この男、本当に医者なのか？」とか「なんなのだ、この病院は。」などこの病院に来てしまつたことを後悔している。しかし、伊良部がどの患者にも行つていくビタミン剤の注入や、病気についての話が終つた後、伊良部に「明日も来てね」と言われると、どの患者もなんとなくあきらめてしまふのである。だから私は、伊良部には患者に「また来たい」と思わせる魅力があるのだと思つた。

私は今まで、「魅力」という言葉について知つてはいたが、具体的にどのようなものかわかつていなかったことに気がつた。「魅力」と聞いて私が思い浮かべるのは、テレビに出演している女優や俳優、歌手である。女優や俳優は、顔が整つていてスタイルが良いという所に魅力があるのはもちろんだが、テレビドラマなどに出演したときの演技にも魅力を感じる。歌手は、見ために魅力がある場合もあるが、最も魅力があるのは声だろう。「魅力」という言葉を使うのは、人よりも優れたものがある時だと思ふ。女優や俳優の人よりも優れた所は、見ためや演技で、歌手の人よりも優れた所は、声である。しかし、伊良部は太つていて、中年で、色白のアザラシのような容顔である。さらに、患者に注射をうつ所を見るのが好きで、子どものようにわがままである。それに関わらず、患者たちは「また来たい」と思ふから、伊良部に魅力を感じているのだと思ふ。患者たちが伊良部に魅力を感じるのはなぜかと考えると「魅力」は人よりも優れたものがある時に使うという私の考え方が間違つているのかもしれないと考え直した。伊良部は、色白のアザラシのようで、性格も変わつていて、それでも魅力がある。考えれば、考えるほど「魅力」というものがどのようなものなのかますますわからなくなつていく気がする。もし、私が病気になつて伊良部に会つたら、私もまた伊良部を訪れるような気がする。伊良部は、おかしいことを言つているのかと思へば、なるほどと思ふようなことを言つている。何にも考えていないように見えて、本気で考えているのが伝わってくるから魅力を感じるのかもしれない。私は、結局「魅力」が何なのかはよくわからなかつたが、「魅力」は人を楽しくさせたり、元気にさせたり、私は、結局「魅力」が何なのかはよくわからなかつたが、「魅力」は人を楽しくさせたり、元気にさせたりできるということはわかつ

た。私も少しでも、人を楽しくさせたり、元気にさせたりできる魅力がほしいと思った。

容疑者Xの献身

東野 圭吾 著

建築学科1年 三好美咲

容疑者Xの献身を読んで、私は、愛というものについて考えさせられた。今まで自分は愛というものを知らなかった気がする。この物語を読んで、究極の愛の重みをととも感じた。

物語は、主人公の天才数学者・石神が殺人を犯してしまった隣人の靖子をかばうという話である。石神は、天才数学者でありながら毎日満足できない生活を送っていた。隣人の一人娘と暮らす靖子に思いを寄せながら。彼女たちが殺人を犯したことを知った石神が彼女たちを救うために完全犯罪を企てる。大体のあらすじはこんなところである。ここからまだまだあるのだが、私はその中で、愛の大きさというものにすごく驚いた。物語の中で、石神は、彼女たちが犯した罪をすべて自分に被せて最終的には自首する。彼女達は、はっきり言えば他人である。それなのに、自分の人生を棒に振るようなことが出来るだろうか。石神はそれほど彼女達、特に靖子の事を愛しているのかと思った。私は、実際このような体験はないが、絶対に無理だと思う。

石神が、靖子の事を愛していたから、かばえたのだと思うが、私にはできない。私は、愛しているからこそ、罪を償って欲しいと思った。自分を犠牲にしたくないという気持ちもあるのかもしれない。物語の中で、石神は、「彼女たちとどうにかなろうという欲望は全くなかった。自分が手を出してはいけないものだと思ってきた。それと同時に彼は気づいた。数学も同じなのだ。崇高なるものには、関わられるだけで幸せなのだ。」と言っている。私は、この文を読んだ時、石神は心の底から靖子を愛していたのだと思った。人間誰でも人に何かしたら、見返りを求めてしまうものである。

私だったら、求めている。これだけしたのに何で何も返してくれないのだろうと思ってしまう。関わられるだけで、幸せという気持ちなんて忘れてしまう。私は、石神の考え方が理解できるようで、なかなか理解できなかった。確かに、自分の好きな人や愛する人に関わることは、嬉しい。ふとした事でも嬉しい。でも、いずれ関わられるだけでは満足しなくなってくる。都合良く使われている

のではないかととも考えてしまう。石神はそんなことも気にならないほど、靖子の事を愛していたんだなと思った。結局、靖子も自首をする。

私には、石神がすごく純粋な人に見えた。

結論を言うと、私は石神の考え方がすごいと思った。愛にはいろんな形があるのだとも思った。友達のことを思う愛、石神のように、見返りを求めることのないまっすぐな愛。この本には、たくさんの愛の形がつまっていると思った。私はまず、身近な人から、石神のように愛していこうと思った。まずは、家族だ。次は、友達。最後は、自分の愛する人である。

この本は、推理のおもしろさもあつたし、人間の感情を考えさせられる部分もあつた。いつか私も、石神のように、見返りを求めず人を愛したいと思った。

2年生の部

ほんまにオレはアホやろか

水木 しげる 著

機械工学科2年 深栖亮介

今日本は不況の真只中である。もちろん日本の企業も不景気な訳である。これもアメリカからきたリーマンブラザーズ破綻という波風を受けたからだ。また大手輸出企業だけが不況な訳では無く、その輸出物のほとんどに下請企業を含めて繋がりがあつたため、一見輸出とは関係ない会社でも根っこで繋がっているために、ほとんどの企業があおりを受けたのである。正直自分には関係ないと思いつつも、派遣切りにあつて都内公園でホームレス暮らしを送っている人々を見ると、軽くゾツとしたりする。また、これには親も大変敏感で、勉強しろという口癖が五割増である。ただ、僕はこの機に考えてみた。「このままある程度の所に就職して、本当にそれでいいのか」と。ひねくれているかもしれないが、「何か自分には足りないんじゃないのか」と。その足りないものを模索していた時に、この本は僕の心に直接響いた。

さて、あらすじだが、水木しげる（本名、武良しげる）は子供の頃はガキ大将で妖怪研究に夢中。そのため中学入学試験にはもちろん失敗、学校は落第する。

その後就職するも寝坊でクビに。唯一得意な絵画をのぼすために洋画研究所に通いだすも、そのうち戦争が激しくなり兵隊へ。しかしそこでも落第兵で南方の第一線に行かされる。片腕を失いながらも、九死に一生を得る。南の島で見つけた

「楽園」に魅せられながら、赤貧時代を生き抜き、「ゲゲの鬼太郎」を生むまでの物語である。

さて、この物語を読んだ時、自分に足りないものをすぐ感じとることができた。特にそれを感じた場面は二つあった。一つは今の僕と同じ年頃である場面だ。

ここまで自分の信念を貫いている奴は同学年にはもちろんいないであろう。好きなことだけとことん熱中して、周りすら見えていないのだ。周りに何と言われようと我が道につき進む。僕も「勉強は嫌だな」「好きなことだけしたいな」と思うが、実際にそれはできない。

時代が時代というのもあるが、本当にそれをやったのけた水木氏には感服した。

二つ目は、戦争後から漫画家になるまでの話だ。終戦後、片手を失いながらも美術学校に通ったり、貸間業をしたり、紙芝居をやったりと様々な人生なのだ。

そういえば中学校の担任の先生は、バリバリのヤンキーだったが改心して勉強し、大学大学院と出て、研究者になったそう。そこで、ガンを撲滅する薬を開発して大儲けしようと考えていたが、失敗して三十過ぎから教師になった苦労人だった。彼はいつも「信念さえ持っていれば、人生何とかなるんや」とおっしゃっていた。

彼にしても水木氏にしても、生きる力がある。確固たる信念がある。今の不況の時代に必要なのはそういう部分なのかも知れない。

どれが正しい道なんて分からないし、そんなものはないかも知れない。ただ目の前の道を切り開くのは、粘り強さだと改めて思わせられた。この世に粘り強さに勝るものはない。才能、才能があっても成功できなかったものは枚挙にいとまがない。天才、報われない天才というのはすでに決まり文句になっている。教養、世の中は教養ある浮浪者であふれている。粘り強さと断固たる信念だけが無限の力を持つ。僕に足りないのはそこだとわかった。

おさん

山本 周五郎 著

電気情報工学科2年 本計貴紀

自分は、「サムライ」という言葉が好きだ。また「武士道」という言葉も好きである。2003年に公開された映画『ラストサムライ』は何度も繰り返し見て見た。侍の中でも特に江戸時代の侍が好きだ。なぜそこまで侍が好きなのかというと、彼ら

のライフスタイルにある。

自分の勝手な偏見だが、真の侍とは、学問、武術、精神の鍛練に励み、主君に忠義を示し、欲を出さない、人を気遣い思いやっている、というイメージがある。

今回読んだ、『おさん』の中でも、短編「青年」は、まさに自分の思う侍にぴったりな話であった。主人公は徳川四将の一人、井伊直政の二男、直孝の守役である余吾源七郎だ。話の中でやっぱりこいつは侍だなあと思う所を二つ紹介したい。一つ目に、源七郎は関ヶ原の合戦の際、島津義弘軍の殿部隊の侍大将である阿多盛敦を討ち取ったにも関わらず、一切報告しなかった。その事実のちに本多忠勝が巡察の帰途に井伊直政を訪ねた際に判明した。直政は、「なぜ報告しなかった」と尋ねられると、「侍大将を討ったからといって功名だとは思わないし、また雑兵だからといってつまらぬとも存じません。私はただ我が軍の勝利のためだけに働いたままであり、報告する必要もないと思ったからです」と淡々と答え、俸禄増加を求めると欲を決して出さなかった。二つ目は、それからしばらく経ち彼の主君である直孝の宿所に盗賊が入ったことがあった。その際直孝自ら賊を切り捨てたが、源七郎は縁側に座ってそれを見ていたという。それを聞いた父、直政は源七郎を呼び「なぜ、あの時我が息子を助けることなく見ていたのだ」と問いただすと、源七郎は「直孝様は、やがては徳川家一方の大将となるべきお体であります。柔弱な育てようをつかまつつてはならぬと思ひ、手を出さずにいました」と答えた。本当に主君の事を思い、あえて助太刀しなかった源七郎に直政は感服した。

この話を読んで、自分はやっぱり源七郎は真の侍だと思った。自らの欲を出さず、主君の事を思い、気遣い、主君のために必死に働く、その姿に自分は感激した。また、人を気遣い思いやるという自分の侍の定義に当てはまっている人が周りにいるとも思った。それは、自分の父と母だ。まず父について説明したい。自分の父は、電気工事屋を営んでいる。その会社に自分も手伝いに行っている。働く前までは、父が毎日、家に帰ってくるとニコニコしているので「たいして辛い仕事じゃないんだ」と思っていた。しかし会社に行ってみると、社員の人と一緒に高い所に重たい荷物を持ち上げたり深い穴を掘ったりと汗だくになりながら仕事をしていた。自分も手伝っているが一ヶ月で五キロ痩せるぐらいの重労働だ。現場では辛そうな顔をして家に戻ったらニコニコしている。自分は父に「なんで家に帰ったら辛そうな顔をしていないのか」と聞いてみた。父は「仕事で疲れた姿

を見せたくないし、お前らも見るのは嫌じゃろ？」と言った。自分たちを養うために一生懸命に働き、自分が生まれて十七年の間自分の知らない所で気を遣っている父は現代の侍だと思った。また母については何かにつけてすぐ怒るキレキャラのイメージが強かった。小学生の頃は、母は魔王だと思っていたほどだ。ある時父が自分に「もともとオカンは怒る人じゃないんじや。なんでオカンがお前らに怒るんか知っとるか？お前らが生まれた時、お前らが立派に育つように怒り役という悪役を買ってくれたんじや。好きでもない怒ることをお前らのために頑張るとんで」それを聞いて将来の自分たちの事を思い頑張っている母親の優しい心を感じた。

「青年」は、自分に人を思いやり気遣う気持ちを教えてくれた。これからは、父母を大切にし、思いやり、また自分の友人をはじめ自分の周りの人、ひいてはすべての人に思いやり気遣いをしていき、現代の「サムライ」になりたいと私は思う。

博士の愛した数式

小川 洋子 著

環境都市工学科2年 貝原 健太郎

私は、数学があまり好きではない。

私が中学生の頃は、特に、苦手意識もなく取り組んでいた教科だった。どちらかといえば、得意とする教科だった。ところが、高専に入学してからは、得意といえる教科ではなくなった。中学の時の数学より難しくなり、授業時間も増えて、序々に苦手意識がでてきた。そんな苦手意識を持っていた数学に関わりがありそうなこの作品を選んで読んだ。以前、この作品が映画化された時、あらすじを聞いていたこともあり、親近感もあったからだ。

この物語は、交通事故で脳にダメージを受けて、80分しか記憶が持たなくなってしまう64才の数学者と、家政婦とその十歳の息子との、心のふれあいを通して、友情、恋愛、家族愛、敬愛等、すべて含めた人間愛について描かれている。そして、作者の数学への憧憬、数学美への心酔があますところなく表現されている。そして、私の大好きな野球と、苦手意識のある数学とが、パーフェクトに結びついてしまうのだ。

私は、九才の時に少年野球チームに入って今日に至るまで、九年間ずっと野球を続けてきた。

少年野球の頃は、練習の送迎、遠征の付添い等、すべて親の力に頼っていた。そのことが心強かつ

たのだが、あたりまえのように思っていたところがあった。

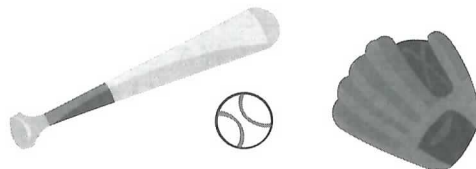
一年に一度は必ず、プロ野球観戦にも連れて行ってもらっていたし、楽しい思い出もたくさんある。

2004年8月、私は家族で広島市民球場へ広島対巨人戦を観戦に行った。お菓子やジュースを買ってもらって、声を張り上げてカープを応援した。試合は好ゲームで延長線に入り、このままだと引き分けかと思われていた12回裏、カープ倉選手のセンター前ヒットでカープのサヨナラ勝ち。時刻は午前0時をまわっていた。家に到着したのは、午前3時半。新聞配達のおじさんと同時に、家に到着した。テレビでは、女子柔道の谷亮子選手が、決勝戦を戦っていた。私は、当日、少年野球の公式戦があったが、谷選手の試合を応援して、金メダルを確認して仮眠をとって、午前七時集合場所に行った。両親も、私も、目がチカチカして眠かった。体もだるかった。試合中も頭がボーとして何をどうしたか覚えていない。でもこんな経験はそうそうできるもんじゃないねと、私たち家族の楽しい思い出の一つになっている。

高校野球は、中学のクラブ活動とはまったく異なり、「監督」という指導者がいて、練習時間も長くなり、ボールも硬式になった。なかなか一勝ができず、悔しい思いも、練習もきついと思うこともある。しかし、練習終了後の達成感、一勝の喜び、チームの皆と過ごす充実感は何にもかえがたい。そして、何よりも楽しい。ともかく、楽しい。

今、私が野球に打ちこむことができるのも家族の支えがあってこそである。道具をそろえるにも、お金がかかる。遠征にも応援にきてくれる。そして、いつも変わらず応援してくれている。見守ってくれている。

この作品の登場人物の「ルート」は、私と野球との関わりを振り返らせてくれた。野球との関わりから、改めて、家族のことを思い起こさせてくれた。もし、自分に家族がいなかったらと想像できるのも、家族がいるからこそだと思った。私にとって家族とは、「友愛数」である。「滅多に存在しない組合せであり、神の計らいを受けた絆で結ばれあった数字が見事なチェーンでつながり合っている。」という作品中の文章が、深く、重く、切なく、そして愛しく感じられた。



エイジ

重松 清 著

建築学科2年 幸田 進之介

僕が中学生の頃、一体何を思い、何を考えていただろう。ほんの一年と数カ月前の事なのに、すでに記憶はあやふやなものになっている。では、中学時代がそんなに退屈なものだったかと問われれば、そんなことはない。空手道で黒帯に認定されたこと、修学旅行で夜中に集団失踪をして怒られたこと、そしてこの学校の入学試験に合格したこと…。どれも大切な思い出だ。

ただ、その他の、日常の部分の記憶は、霧がかかったように薄れてしまっている。僕は決して勉強ばかりしていた訳でもなく、むしろ他の人よりも多く遊んでいたように思う。その瞬間は、楽しかったはずなのに、忘れてしまった。それは、僕が何も考えずに中学時代を過ごしてきたからではないだろうか。

「エイジ」は、桜ヶ丘ニュータウンに住む中学二年生の男子生徒、高橋エイジの物語だ。エイジは、何の変哲もない学生生活を送っていたが、そのうち、町に連続通り魔事件が発生する。次第にエスカレートする犯行。そして、ついに捕まった犯人は、何と同級生だった。その日から徐々に変化していくエイジとその周囲の人々。エイジは自分自身と犯人を重ね合わせ、自分にも、通り魔になりうる心、「その気」があることに気づき、それを認め、自分の中に隠しておくことで、また一歩、成長する一。

「エイジ」では後半、「キレル」ということを中心に話が進められる。エイジは途中、自分をつないでいるものからキレてしまいたくなり、学校や町から、チューブを引きちぎる要領でキレて逃げ出してしまう。そして、通り魔に間違えられ、通り魔になった同級生と似た体験をする。だが、そのことで、エイジは通り魔になった同級生と自分は、違うということに気づく。そして、一度はキレてしまったものを、再びつなぎ直す。

エイジは、一度「キレル」事で自分が自分であることを見つけたのだと思う。キレルことで、大切な何かを学んだのだ。

僕は中学生のころ、よく「キレて」いた。怒りに感情を任せ、理性を失う、という意味ではない。僕の場合は、「キレたふりをする」こと。キレたふりをすれば、いつでも相手は逃げて行った。何か気に入らない事があったら、キレてしまえばいい。キレてしまえば、もうそれ以上、何も考えな

くていい。自己を主張するために、髪も染めた。先生に何を言われようと、気にしなかった。友達もたくさんいて、本当に楽しかった。

でも、やっぱりその記憶は、あやふやなものだ。

「エイジ」を読んで、僕は、自分の中学時代を後悔した。面倒になったら、深く考えたり、悩んだりせず、キレて、そこで終わり。キレルということは、そこで思考を停止させることだ。そんなことをしていたから、一生で一度の中学生生活が、とてもあやふやで、中身の無いものになってしまった。

高専に入るとき、僕はもうキレないようにしようと思った。髪も、黒くした。なんとなく、このままではいけないと思っていたからだ。そして、僕はこの「エイジ」という作品に出会った。キレて、それで終わりではなく、キレルことで、自分を見つめ直し、変えていくことができるのだと知った。けれど、僕はもうそう簡単にキレルことはないだろう。キレルのは、中学でもう十分だ。これからは、どんなことがあっても思考を停止せずに自分が納得するまで考え、相手と話し合い、実りある学校生活を送って行こうと思う。

3年生の部

平和ってなんだろうー

「軍隊をすてた国」コスタリカから考える

足立 力也 著

機械工学科3年 大廻 勇人

私が読書感想文を書くためにこの本を選んだ理由は、ただ単に「平和についてなら感想文が書きやすそうだったから」という不純な思いからである。それにコスタリカなんて国聞いたこともないし、もしかするとこの本を選んだのは失敗ではないかと思った。しかしこの本は予想以上に私を魅了したのだった。今からそのことについて触れていきたいと思う。

「平和ってなに？」そう聞かれると多くの人々は「戦争のない世界」や「みんなが幸せに暮らしていける世界」というだろう。本のタイトルを見た時、私もそのように思った。

しかし、その考え方はこの本によって少し変えさせられることになった。なぜならコスタリカの小学五年生に同じ質問をしてみると「民主主義、人権、環境」と平然と答えたそう。これにはびっくりさせられた。日本のどこにあの質問で民主主義と答えられる小学生がいるのだろうか？というより民主主義という意味を答えろと言われ答えら

れる大人も少ないだろう。そこから日本とコスタリカの平和への意識の高さの違いが見受けられる。

コスタリカでは、日本以上に平和に対する一人一人の思いが強い。事実、コスタリカの周辺の国々では紛争が絶えない地域もあるという。

日本は島国であり、周辺に紛争のある国があるわけでもない。ということも意識の高さの違いの要因の一つではあると思うが、一番の違いは「軍事力を持っていない」というところにあると思う。アメリカやロシアといった大国は、他の国に攻められても、それに対抗するためにより強い軍事力を求めている。

平和主義を唱えている日本でさえも「自衛隊」と呼ばれる必要最小限の軍事力を持つ組織がある。しかし彼らには、いっさいの軍事力がないのである。私はここで一つの疑問ができた。「軍事力がなくて、他の国が攻めて来たらどのように対処するのだろうか」しかしその疑問も本を読んでいくうちに解決された。それは「軍隊や軍事力を持つと、かえってお互いの国が疑心暗鬼になる。だから軍事力を持たないことは最大の防衛力」と。簡単に言い換えると「丸腰の相手に誰も喧嘩など売ってこない」ということだ。確かにこれは自分たちの日常生活の中でもある考えだ。私自身、中学生の頃に他校の生徒と小競り合いになった時は「ガン飛ばしてきた」とか「肩があたった」などがきっかけであり、どちらか又はお互いに謝れば済むことであった。この考え方は人が大切にすべきことのひとつだと思う。

話は変わるが、先ほどの小学生が答えた中に「環境」という言葉が含まれていた。私はなぜ環境が平和へと繋がるのだろうかという疑問を感じたが、それも納得して解決した。コスタリカでは1990年代から環境の保護や再生がブームになっていたらしい。それまでコス対価は、バナナやコーヒーの農園をつくるために、山を切り開いて土地を無理矢理つくっていたようなのだが、植物などの生態系が崩れていることを知り、措置をとった。考らの考えをもとめると「自然環境が変化するということは自分たちの周りの環境も変化する。安心して平和に暮らしていくには、環境を守ることも大切である。」ということだ。

今までのコスタリカの人々の考え方を知ってうえで、私なりに気づいたことがある。それは、平和について漠然と考えるのではなく、平和に生きていくためには何が必要で、それを手に入れるためにはどうするか。といった具体的な思想が大切だと考えた。

コスタリカは決して裕福でもなければ、周囲に恵まれた国でもない。日本は口だけの平和主義を

訴えるのではなく、平和の根本的なところから見つめ直さなければならないのではないだろうか。

ものづくりに生きる

小関 智弘 著

機械工学科3年 木戸 志紀

自分達は日々、技術者になるための勉強をしている。技術センターで機械を動かしたり、製図室で図面を書いたり、専門的知識を身につけるための授業を受けたりしている。そして、最終的には、企業に就職して働くことになる。この本には、町工場の技術者をとおして、ものを創るよろこびと、働くことについて書かれていた。

どんな仕事をするにしても工夫しなさいということを知った。もちろん、これは仕事だけでなく、ロボコンをやっている自分には部活でも生かせることだし、勉強についても同じことが言えるのだと感じた。この本ではナットを作ることを等を書いていたが、基本的なやり方では時間のかかるものでも、工夫一つで作業の効率が上がり短時間で大量に作るができるということだった。これは見習いたいと思った。自分に合った一工夫をすれば、日々の勉強にしても部活にしても、もっと効率よく楽になるのではないかと考えた。

また、最近では、「自分に合っていない」や、「ここが気に入らないから」といって仕事をやめたり部活をやめたりする人がいる。自分も嫌なことがあったり、気に入らないことがあったりして部活をやめようと思ったことがある。しかし、この本の「つまらない仕事というものはない。仕事をつまらなくする人間がいるだけである。仕事は味気ないのではない。味気なく仕事をするから、楽しくないだけである。」という文章が自分の考えを大きく変えた。それまでやめることばかり考えていた自分が、どうしたら楽しく部活をすることができるだろうかと考えるようになったのだ。

その結果、自分は部活をやめずに続けている。

この本で学んだことが生きた瞬間だった。そして、今から何年か後に、就職したりしても生かすことができる言葉だと思った。これからもこの言葉を忘れずやっていきたいと思う。

この本を読むことによってものづくりの楽しさを少なからず知ることができたと思う。初めて施盤を回した時の感動は著者と共通のものだったし、人から頼まれた仕事をやって相手を満足させることができたときの喜びなども共通した部分があったからだと思う。しかし、それはほんの一部にす

ぎない。社会に出ればもっと多くの感動や喜びと出会えるのではないかと自分は考えた。そして今まで不安なことだらけだった社会に出るとということが少しだけ楽しみだと感じる事ができた。もちろん辛いことや苦しいこともあると思う。そんな時には、先に紹介した言葉や、これから経験するであろう感動や喜びで乗り越えていけると良いと思う。むしろそうありたいと思った。これは就職した後だけでなく、今後の学生生活でも心がけて生きたいことである。

自分はこの夏休みにこの本と出会えて良かったと思う。この本からは先に述べたように、多くのことを学び、感じる事ができたからだ。しかし、まだ学んで感じたばかりである。今後の人生にこれを生かしてこれらを体験する事ができたら良いと自分は感えている。そしてものづくりとして生きていくことをしっかり楽しみたいと思った。

目を閉じて心開いて

三宮 麻由子 著

環境都市工学科3年 大崎 直生

「幸福力」、どんな物事も幸福に自分自身でもっていき力をすべての人は持っている。つまりその「幸福力」を磨いていくことで、人はどんどん心が豊かに満たされていく。そして「幸福力」にとって大切になっていくのが想像力である。幸福になるには悩むのではなく、考えることをしなければならぬ。考えることはこの先のやるべきことを指してくれる。本当に幸福になりたいならばしっかりとした意志をもち、幸福になりたいと心から願い行動することなのだ。

それらが今、青春まっただ中の僕達に向けて、人生をより良く生きるための作者からのメッセージだった。そこで僕は今までの「幸福力」の使い方について自分自身を振り返ってみる。

僕は中学二年生の時にソフトテニス部の部長に任命された。僕よりも腕前が達つ人も、他の人を引張っていけるリーダーシップを持つ人がいたにも関わらず先輩方へ選ばれた。その理由はただ出席比率が高いからとしか考えられなかった。

正直、任命された時は嬉しかったしがんばっていかうと思った。だが、やはり実力も指導力もない僕の言葉に窮屈になった部員達が、徐々に態度が悪くなっていった。助けをくれる人もいたが状況は変化することはなかった。試合になれば今度は、周りの「部長なんだから」というのがプレッシャーになって良い成績が出せずペアの人に、そ

して団体戦の場合はチーム全員に迷惑をかけ、それがまたプレッシャーになっていった。そのうちに、練習時や家にいる時でも次第にため息が増え、いつも悩んでより一層自分の殻の中に閉じこもって行ってしまった。そして先が見えなくなった僕は辛いことや面倒なことになったら副部長の人に押しついたり、後輩達には八つ当たりじみたことをしたりなど散々で、結局ものすごく辛だけの早く終わって欲しい一年になってしまった。

この頃のことを考えると全く「幸福力」を使う事ができていない。すごく自分が情けなくて腹が立つ。

新入部員は部長を目標にしているのに、引っ張っていく人ならそれなりのことをしろって思う。自分を幸福にするどころか他人をも一緒にまき込んで嫌な気分になって「幸福力」などひとかけらも存在しない、そんな時間だった。しかし、こうしてそのことをもとに反省していることが、僅かながらではあるが今の僕にとっての「幸福力」なのだと思う。

僕はまだまだそんな小さなことくらいからしか「幸福力」を感じる事ができない。だからその小さなことを集めたり、磨いたりして大きなものに変える。そして、僕に足りない想像力をもっともっと膨らませて、同じようなことが起こらないように常に幸福に、自分だけではなく周りのみんなと一緒に巻き込んでいきたい。

嘘つきアーニャの真っ赤な真実

米原 万里 著

建築学科3年 小林 香菜

50カ国以上の国から来た子供たちがいるプラハのソビエト学校に通う主人公・マリ。マリの友人であるアーニャはインド生まれ、北京育ちのルーマニア人。アーニャはついつい嘘をついてしまう誇張癖のある少女。しかし、明るく聡明な彼女は皆から好かれる人気者。共産主義社会を夢みながら、混乱する社会の中で少女時代を過ごす。祖国から文化的に離れているだけに愛国心が強く、マリが羨むほどだった。その後、祖国へと帰ったアーニャは、チェウシェスク政権の側近である父親の立場に守られながら、祖国ルーマニアを捨て、イギリスで生きていたのであった。

見たことのない祖国にあこがれ、まわりがうんざりするほどの自慢話をしてきたアーニャが「私の心は90パーセントがイギリス人よ。」と言ったのはなぜだったのだろうか。嘘つきは嫌われるし、

信用されなくなるので、私はできれば嘘をつきたくない。本音を隠しながら生きるアーニャには考えさせられた。

アーニャは、少女時代からよく嘘をついた。その嘘は自分の得にはならないものばかり。真実とは異なる嘘をつくことは文化的に悪いことだとされている。一方で、「嘘も方便」などといった嘘を容認する言葉もある。以前、バスの中で「すぐ降りるので、どうぞ。」と言って老人に座席を譲る女性を見かけた。しかし、その女性は次の停留所でも、その次の停留所でも降りなかった。彼女がバスを降りたのは、老人に席を譲ってから大分あとのことだった。老人の立場で考えてみると、自分が座るかわりに誰かを立たせるといのは後ろめたい行為である。だが「すぐ降りる」という言葉によって、その後ろめたさはなくなる。席を譲った女性は、老人を救うため、立場を守るためについた嘘だった。

アーニャは物語のなかで、授業で使う黄色いノートを近所の店で買ったと嘘を言った。本当はフランスに住む兄から受け取ったものだった。その嘘は、社会主義を理想としながら、父の特権階級を利用し、フランスへと移住した兄を日々高まる反社会主義の非難から守るためについたものだった。

また、本当はユダヤ人である自分や家族を純粋なルーマニア人だと言って偽ったのも、人種差別から避けるためだった。アーニャのついた数々の嘘は一見なんの意味も持たないようにみえるが、席を譲った女性と同じ心理ではないか。物語でイギリス人として生きるアーニャ。自分が厳しい社会情勢の中で生き抜くために、昔と変わらず祖国を愛しながらも自分を守るためについた嘘かもしれない。

たしかに、嘘は人間の私的な妬みや欲から生まれ、他人を傷つける結果になることがある。しかしやはり、嘘にもつかなければならない時がある。必要な嘘もあるのだ。私は、調子の悪い母に対して「なにか悪い病気じゃないか」と正直に言って、ひどく不安にさせて、後悔したことがある。正直がすべて正しいとはかぎらないということだ。私がアーニャだったら、巧みに嘘を使いながら生きていけないと思った。本を読み終わったあと、嘘をつかざるを得ない状況を作りだした社会に対して怒りがわくと共に、アーニャを尊敬する気持ちがわいた。

アーニャのように優しい嘘をつける人間になりたいと思った。

4・5年生及び専攻科生の部

海と毒薬

遠藤 周作 著

建築学科4年 末重麻衣

私は人を殺したことがない。ニュースになる罪を犯したこともない。大抵の人がそうである。しかし、犯罪は毎日のように行われている。これは私たちが受け止めるべき事実である。

人は罰を受けることを恐れる。それなのにどうして人は罪を犯すのか。日本人の罪意識について深く考えてみることにした。

「海と毒薬」は米軍捕虜の生体解剖実験を題材として小説化された。これは戦時中に実際に起きた衝撃的な事件である。人を生きたまま解剖したら、良心の呵責に苦しむのか。事件に関わった人々の苦悩と心の葛藤が鮮明に描かれている。

生々しい解剖実験を行った背景として、要因は二つある。一つは、戦争という時代である。人は空襲で死んでいく。人が次々と死ぬ世の中で、正しい判断は失われる。また、命の重さの感覚さえも麻痺させ、人々を狂わせる。

もう一つは、心の奥に潜む欲望である。人は欲望という誘惑に簡単に負けてしまう。権力争いは卑劣で醜い。功績を得ようと欲にまみれる。人体解剖実験が自分自身の良心に反したとしても、人は自然と優位な立場の方へ流れていく。これは日本人によくみられる傾向であり、共犯者意識も高い。

生きたままの人間を解剖して殺す。これは人の理念に反する。医学の進歩だと綺麗ごとでは済まされない。

これではただの人殺しと同じである。どのような状況下でも、人を殺す権利は誰にもないのだ。医者たちが犯した罪は決して許されるものではない。命の重さが明確であれば、人間が「実験台」や「出世の手段」にはならなかったはずだ。

現代では殺人や薬物、少年犯罪など多くの犯罪が行われている。利益に欲を出し、違法行為を行う。やっつけたいと分かっているのに、欲望や感情に心が支配される。人間の良心とは、その場の雰囲気や考え一つで変わってしまう頼りないものである。世の中は罪であふれ、汚れていく。

罪を犯す人とはどのような人間なのか。実はどこにでもいる平凡な人のように感じる。周囲の環境が平常心を狂わせ、違った自分を作り出す。「欲望・恨み・嫉妬」が複雑に絡み合っただけで犯罪者は出来上がる。

キリスト教を信仰する米英人は、普段の行動から「神の罰」を意識している。それに対して日本人は、罪を犯しても「ばれなければいい」という軽い考えをもっている。日本人は罪意識が薄いのだ。原因なのは、仏教を信仰する日本人にとって「神」という存在が曖昧なせいである。しかし、日本人が罪意識をもたなければ犯罪が無くなることはない。罪を犯してしまった後ではもう遅い。だから、罪意識について考え直す機会が必要である。

欲に負ける人間の弱さ。心の奥に潜む汚い部分。これは誰でももっている。汚い部分を心の表面に呼び出してはならない。罪を犯すと悔恨の情は一生つきまとう。残り続ける苦痛。激しい胸の痛み。心を引き裂くような後悔の念。罰に怯え、苦しむ日々。真実を打ち明け、罪を償ったとしても世間の目は冷たく降り注ぐ。寂寥感と孤独感が消えることはない。また、心の荷物を取り除くこともできない。

何も起こらないこと。平凡であること。これが人間にとって一番幸せなのかもしれない。私は何が善で、何が悪であるかを区別し、理解している。しかしこの先、良心が消失してしまったら、私は罪を犯してしまうかもしれない。目に見えないものに支配されず、自由に生きる。そうすれば罪を犯すことはない。真っ直ぐに生きていくためには、心が強くなければならぬ。欲でゆがんでいる世の中で、私なりの生き方を導き出したい。

坊っちゃん

夏目 漱石 著

建設工学専攻2年 小早川 誉博

「坊っちゃん」(1906作)を読み終わると、僕は幸せな気分につつまれた。はじめはストーリーの展開が楽しかった。若い教師が旧制中学の教師として四国の城下町に赴任してくる。出くわした同僚にあだ名をつけた。赤シャツ、のだいこ、うらなり、山嵐……。腹に一物ある赤シャツは嫌なやつだし、ゴマすり男の野太鼓は、もっと嫌なやつだ。坊っちゃんは正義感の山嵐と二人して、陰謀組に天誅を加える。野太鼓の顔が卵の黄味で黄色くなったのは、いい黄味だ。胸がスカッとした。

「坊っちゃん」を読み進めていくうちに、僕が今までに読んだ本とは何か違うことに気がついた。主人公は「坊っちゃん」とあるだけで、姓も名もわからない。

しかし、歳はこまかく書いてある。まだ経験に

乏しいと赤シャツに言われ、坊っちゃんは答えた。「どうせ経験には乏しいはずです。履歴書にも書いてきましたが23年4ヶ月ですから」性格はどうだろうか。当人の口から、出だしの1行に述べてある。「親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている」一本気で、竹を割ったような性格なのであろう。「親譲り」が何度か出でくるから、父親も似たような人だったのだろう。年齢、性格、生い立ちから、赴任先の月給、「1週21時間の授業」のことまできちんと書いてあるのに、名前ばかりは終始分からない。タイトルの「坊っちゃん」で押し通してある。こんな小説も珍しいものだと感じた。そう思ってまた読み直すと、妙なことに気がついた。

出だしの「親譲りの無鉄砲で・・・」に続くところだが、主語がどこにもない。学校の2階から飛び降りるのも、ナイフで右の親指の甲をはずすに切るのも、庭先の栗を盗みにくる質屋の俵を捕らえたのも、それがいったい誰なのか、言葉としては一度も出てこない。

それが出てくるのは、下女の清がお金を貸してくれたときである。「おれはむろんいらないとやったが、ぜひ使えと言うから、借りておいた」はじめて「おれは」と主語のかたちで書かれた。段落でいうと、九つ目である。

家族のことでは、兄はおとなしい勉強家だったが、自分は手のつけられぬ乱暴者、母が将来を案じていた。「行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役に行かないで生きているばかりである」巧みに時間の経過がつけ加えてある。四国の城下町に赴任したのは、あきらかにずっと以前のことなのだ。何年前かはわからないが、かなり前であった、相当昔のことだ。東京から四国が遠かったように、語られている経過と語っている現在とは、明らかに時間的に隔たっている。語られているのは23歳4ヶ月の「坊っちゃん」だが、語っているのは、もはや坊っちゃんではないだろう。

だからこそ冒頭の「親譲りの無鉄砲」が深い意味をおびてくるのだと思う。当人は「無鉄砲」と言っているが、不正や企みが大嫌い、裏表のある人間に我慢ができない。世の中、人の動きに同調できない。そんな自分を「親譲りの無鉄砲」と言ったのだろう。鉄砲だまのように、まっすぐにしか生きられない。小説の終わりに、「ある人の周旋」で新しい職場へ技手として入ったとあるが、きつと技手のまま定年を迎えそうな人だと感じた。

そして清は、ただの年とった下女ではないだろう。世の中に合わせられない「坊っちゃん」を、じっと見守っている。「だから清の墓は小日向の養源寺にある」影をおびた人が、何かを思いだす

ようにして墓の前にいる。読後の幸せな気分は、「坊っちゃん」のもつ、ひそかな影のせいである。

〈佳作〉

梟の城

司馬 遼太郎 著

電気情報工学科4年 舛本 華

梟の城は忍者の話である。忍者というのは、任された仕事を遂行することに全精力を捧げ、そこに私情が入り込んでほしくないため、入り込まないように小さい頃から訓練してきた。そして、人間は草木と同じ目で見ると、そこに同情や感情の共有などは存在し得ない。だからこそ、仕事の邪魔をする人間は迷いなく殺し、裏切った仲間に対しては、たとえ顔見知りでも容赦なく征伐するのが忍者の掟である。『梟の城』の主人公の葛籠重蔵は敵のスパイである小萩と思いを寄せ合う仲だった。そのため、重蔵は忍者の掟と小萩への思いの間で揺れ動く。

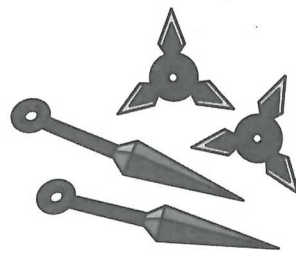
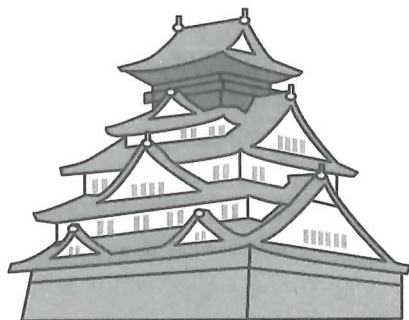
この敵同士の恋では似たような映画を見たことがある。『Mr&Mrs Smith』だ。この映画は夫婦で敵同士のスパイを知らず知らずにしていて、最後には協力しあい危機を脱出するというものだった。この映画との共通点は両方が騙し騙され…の戦いということだ。だがこの両方で決定的に違うのは仕事に対する姿勢である。

重蔵と小萩は思いをわかってはいるものの、例の忍者の掟に遮られてしまい、うまくくっつけない。だが、小萩は私と逃げて嫁にしてほしいと食い下がったが、重蔵は女より仕事をとるといって去ってしまう。このときの重蔵の捨て台詞は「いつかは愛した女にも飽きるが仕事には飽きない」

である。この台詞は現代にも通じていると思う。やはりどの時代でも男性には仕事が生きがいなのだろう。また、対照的に小萩は「女のいのちは、ただ人を慕うことによるのみ燃え続ける」といつている。これも現代の女性にも通ずるだろう。

こうして見てみると、どの時代でも男性が上位の立場なのだなと思った。現代でもだいぶ女性が進出してきたが男性上位というのは払拭されていない。『梟の城』のなかではもうひとつ例がある。木さると風間五平である。この二人は許婚なのだが五平は木さるを出世のため、性欲を満たすための道具としかとらえていなかった。木さるは毎日五平が深夜に帰ってくるのをひたすら待ち続けるのである。結局は出世もうまくいかず捨てられてしまう。このように、結局女性は家庭を守らなければならないため、男性の帰りを待つしかないのだ。

重蔵と小萩の恋の行く末はよくわからなかった。ただ、成就していないのは確かである。忍者の恋はよくわからないが、忍者の掟にあるように、仕事のなかに私情を入り込ませない修行をしているにも関わらず、重蔵は小萩に恋をしてしまった。そのことはもう十分に仕事を放り出して小萩と逃げる理由になるのではないかと思う。この目線こそ女性の考え方だが…。すくなくとも少しの心の迷いで忍術がうまく使えないのなら幸せになる道もあるのではないか。あえてお互いがお互いを殺す目的を持つこともないのではないか。そういう考えが頭の中を支配する。現代では少し女性のそのようなわがままな意見も受け入れられやすくなってきたような気がする。お互いが好きあっていたら逃げて新しい土地で新しい生活を始める。女性にとっては昔より暮らしやすい時代が来ているのである。



留学生が紹介する外国の図書館 1

私の街の図書館

電気情報工学科 3年

フック



私はベトナムから来ました。フックと言います。私の街はベトナムの真ん中にあるダナングと言う街です。そこに、私が気に入っている場所はたくさんと思いますが、今街の図書館について話したいです。

図書館は街を流れるハン川に沿って建てられました。新しいタイプではなく古い構造です。面積が広く図書館の周りには木が沢山植えてあります。だから、私は子供の頃、図書館へ良く来て、木の下で勉強していました。静かで空気もきれいだから、本当に気持ち良いです。

これは一般的な街の人のための図書館だから、本も種類も多いです。特に、ベトナム語だけでなく、外国語の本を求める読者も満足できます。また、図書館の中に障害者専用の部屋があります。だから、毎日年齢、職業を問わず、大勢の人が訪れます

それ以外、図書館には外国語のクラブがあります。興味を持つ人は土日に来て、外国語の勉強や外国人と交流などいろいろな活動に参加できます。

これは私の街の図書館の紹介でした。あなたの街の図書館はどうですか？

留学生が紹介する外国の図書館 2

ビエンチャン大学 (ラオス) の図書館

環境都市工学科 3年

ケオサワーン



ラオスでよく図書館に行くようになったのは、大学入学後でした。私が入っていたラオス国立大学には大学図書館と日本センターの図書館がありました。

まず、大学図書館を紹介します。ここはうちの大学生しか図書館カードを作ることができません。図書館に入った所に読みたい本を探すためのパソコンが置いてあります。図書館の中には色々な分野の本があります。

専門に関する本と新聞や雑誌を読む場所は分けています。また論文が集められている所は別にし

ています。

辞書以外は一週間に3冊の本を借りることができます。

多くの大学生たちは自習の時に図書館に来ています。

他の人を邪魔しないように皆、静かにしています。図書館でどんなことをするか、人によって違いますが、大体宿題とレポートをやりに来ます。私は外国語の本に興味がありました。特に英語の本でした。本を読む以外、図書館の上にあるパソコンとビデオの部屋に行きます。

もう一つの日本センターの図書館では、誰でもメンバーカードを作ることができます。ここには色々な外国の本が置いてあります。特に外国語の本は多くありました。日本センターの図書館には、大学図書館と違って、スポーツや音楽、小説、健康、経済など色々な分野の本があります。日本センター図書館なので、日本に関する本がいっぱいありました。私はここで日本の事がもっと分かるようになりました。日本のお祭りや文化は面白いと思っていました。他の国の面白い本も結構あります。

暇な時にこの二つの図書館を利用して充実した時間を過ごすことが出来ました。

行事報告 第6回ブックハンティング

教育センター長補

原本博史



呉高専図書館には90000冊を越える蔵書があります。

閲覧室に並んでいる本以外にも書庫や研究室などにたくさんの本が存在します。それでも毎年おびただしい数の本が発行されているので、必ずしも世の中にある全ての本が揃っているわけではありません。

学生の皆さんは、図書館で「希望図書購入システム」を利用し、読んでみたい本や興味のある本を図書館に入れてもらうことができます。しかし実際に本を手に取り、その内容を確かめ、読みたい本かどうかを判断したいことも多いでしょう。

そんな皆さんの要望に応えるため、呉高専では毎年前期末試験最終日の午後に「ブックハンティング」を開催しています。各クラスの代表が集まり、普段個人で本を買うのと同じ要領で、図書館に置いてほしい本を選んでもらうイベントです。

今年度は8月4日に広島市南区にある「ジュンク堂書店」にてブックハンティングを行いました。今回は校長先生にもご参加いただき、普段よりも賑やかで緊張感のある中、始まりました。

本を選ぶルールは「図書館にふさわしい本であること」と「予算は一人一万円以内」です。大き

な書店なので最新刊も多く、単行本や文庫本など多くの文芸書が選ばれました。電気や機械に関する専門書を選んでいる学生も多くいます。デザインの参考のための写真集も並べられ、学生の興味や専門性が反映される、非常に高専生らしい本が選ばれていきます。漢字検定や資格試験の本など、実用性の高い本も候補に上がっていききました。

一万円以内という制限からみんな苦労しているのかと思いきや、ほとんどの学生さんはパズルの問題を解くかのように、うまく欲しい本を予算内で購入していききました。なかなか予定額に収まらない学生さんもいましたが、試行錯誤しながらなんとか一万円の上限に合わせてくれました。

校長先生も、普段学生がどんな本を読んでいるのか、どのようなジャンルが人気なのかを興味深くご覧になっておられました。

試験が終わった直後で疲れきっているのでは、という心配をしましたが、皆さん非常に熱心に素晴らしい本を選んでくれました。身近にいる同級生らが選んだ本にどんなものがあるか、ぜひ図書館に足を運んで確認し、手に取って読んでみてほしいと思います。参加してくれた学生の皆さん、及び忙しい合間を縫ってご参加頂いた校長先生、そして多くの学生を受け入れてくださったジュンク堂書店の皆様には感謝します。

今年度は図書館のフロアが広くなりました。今後は書架や閲覧スペースも増える予定です。分野を問わず様々な本に触れる機会を、図書館はこれからも用意していきます。もちろん来年度もブックハンティングを開催予定にしています。今年度の活動を見て一人でも多くの人に、このイベントに協力してもらい、さらに活気あふれる図書館にしていきたいと考えています。



新任教員の随想

本が見せてくれた私の興味の原点



人文科学系分野 新家百合

私は物心がつくころから、とにかくカタカナの国名、地名、人名が出てくる物語が大好きであった。幼いころよく通っていた公民館の児童図書館で、ぱらぱらとページをめくってカタカナがあることを確認し借りたものだった。私の周囲に外国人が住んでいたり、異国の文化が存在していたりしたわけではない。にもかかわらず、まだ見ぬ国の言語や文化や習慣に思いをはせながら、胸を躍らせて何回もページを繰っていたことを思い出すと、この頃から「自然言語」や「異文化」への興味は既に持っていたのだなと感慨深い。

特に驚いたのが、今でも実家の大きな書棚に並んでいる児童文学の多くが東・中欧地域で書かれていたことである。ルーマニア、スロバキア、ハンガリー、ポーランドなどなど、自分が英国に在住していたころに出来た友人はダントツの数でこの地域の出身者であった。「なんだか気が合うよね」「血のつながらない姉妹のようだよ」とそれぞれの友人と話したことがある。

以前からこの地域出身の友人が多いことが気にはなっていたのだが、これも私の幼児の頃の「本の嗜好」と深く結びついているのではないかしらと思えてならない。

更に思い出されるのが、何のお祝いでもないのに父がふらっとお土産を買ってきてくれたことである。私にとって人生初の伝記「キュリー夫人」であった。キュリー夫人（マリヤ・スクロドフスカヤ）は皆さんもご存知の通り、ラジウムの発見によりノーベル賞を受賞したポーランド出身の物理学者である。ポーランドは何度も隣国に侵略を繰り返されたという歴史を持つ国であり、キュリー夫人が女学生のころは、侵略のたびにポーランド語は禁じられ、学校での授業をロシア語やドイツ語などで受けたことが書かれていた。

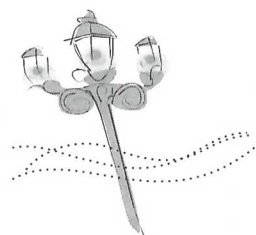
この本がきっかけで、キュリー夫人の学問への

姿勢に大きな影響を受けただけでなく、「母語」と「個人のアイデンティティ」と「国の政策」との関係についても気づかされたのである。今思うとキュリー夫人がポーランド出身だったせいもあって深く私の心の中に残っているのかもしれない。そういえば、どうしてあの時父は他の偉人ではなく「キュリー夫人」を選んだのだろう。今度聞いてみようと思う（何十年も前のことなので、覚えているかどうか定かではないが・・・）。

現在並行して読んでいる本は複数あるのだが、それはいずれも外国語で書かれているものばかりである。

その中でも、多くの友人達の影響を受けて読み始めたのが、ポーランド語で書かれたスウェーデンの児童書“Dzieci z Bullerbyn”とイギリスの児童書“Kubus; Puchatek”である。「大人なのに児童書？」と思われても仕方ないのだが、ポーランド語を学習中の私にとって、良質な児童書を読むのは語彙力の強化や複雑きわまりない語形活用を定着させるためにも良い練習なのである。そして、なんとといっても「言語」が大好きなのである。ひとつひとつの表現が心の中に染み入っているのを感じると至福の喜びにひたることができる。

みなさんも自分が昔どんな本を好む傾向があったかを思い出してみると「自分でも知らなかった自分」の面白い発見があるかもしれませんよ。もしかしたらそれが今後の将来の趣味や仕事につながっていく可能性を秘めているかもしれません。



私の読書体験について



自然科学系分野 松橋 栄市

読書について何か書いてくれ、と言われてこの文章を書いているわけですが、私は基本的には専門としている数学以外のほとんど全てにおいて集中力が湧かないので（数学に関してもかなり怪しいですが・・・）、最近ではまともに本を読むことは殆どありません。それでも年に1~2冊くらいは読んでるので、それについて書いてみます。

私がたまに読む本といえば、大体が著者の実体験をもとにしたエッセイなどです。特に著者の成功前（私が今まで読んだ本の著者たちは、著書が店頭で並んでいるくらいですから今現在は何らかの形でそれなりに成功している人たちだと思います）の苦労がこれでもかというくらいに描かれているようなものが好きです。

私はまだ何かを成し遂げているわけではなく成功しているわけでもないですが、それなりの苦労はしたような気がします。その苦労が報われることを期待していることが、上述のような趣向になっている原因であると自分では分析しています。この手の本で最近私が読んだのは、将棋プロの瀬川晶司さんの「泣き虫しょったんの奇跡」です。この本では瀬川さんの幼少の頃から将棋のプロになるまでについて描かれています。

彼に限らず将棋プロになった人たちの多くは、青春時代の大半を将棋というあまり役に立たないものに費やし、奨励会と呼ばれるところで殆ど悲惨とも言える経験をしますが、その様子がこの本にも描かれています。自分のことになりますが、私も20代の大半を数学という何の役にも立ちそうにないものに費やし、大学院では相当な苦労をしたので、その経験のせいかこの本を読んだときには他人事のような気がしませんでした。

瀬川さんは今現在では世間から注目される人になりましたが、私は注目を浴びるような偉業は何一つ成し遂げていません。彼の本の暗い部分には深く共感しましたが、明るい部分に関して言えば共感するような経験を私はしていないので、その点に関してはこれから精進しなくてはならないと

考えています。

この本に限らず、本の内容と自分とを照らし合わせながら読む習性があります。

あと私は映画が好きなのですが、好きな映画の中には原作が小説であるものがいくつかあります。例えば「スタンドバイミー」という、4人の小学生の友情を描いた映画がそれにあたります。私はこの映画を中学1年生のときに観てとても感動しました（ちなみに映画が好きになったのはこの映画がきっかけです）。

そして原作が小説だという事を知り、すぐに本屋に注文して原作を手に入れました・・・が、外国文学特有の読みにくさも手伝って内容があまり頭に入って来ませんでした。一応は全部読みましたが「映画のほうが面白かったな」と思ったことを覚えています。

最近では「モーターサイクルダイアリーズ」というエルネスト・チェ・ゲバラの旅行記をもとにした映画を観て感動し、ゲバラ本人が執筆した原作を手に入れました。しかし読みにくいという理由（これは本当に読みにくい！）により途中で挫折してしまっただけ・・・はずでしたが、この文章の作成依頼を受けてから、これでは格好がつかないと思い一念発起して最後まで読みました。結局は「映画のほうが面白かった」という感想を抱いたわけですが、それでも読んで良かったと思います。

映画のほうは原作に忠実に作られているとはいえ、制作陣の主観の混入は避けられません。それが悪いというわけではないですが、やはり著者の考え、感じ方をダイレクトに知ることが出来る意味では原作を読むのが一番だと思います。ということで、読了するのは大変でしたが、充実した体験でした。



「本」の中にもあった人生への解



環境都市工学分野 竹内 準一

学校がすべてのことを教えられる訳ではない。

あいにくと教科に馴染まないが、現実の人生の中で避けて通れない出来事も少なからずある。それは誰の身の上にも必ず起こるというわけではないけれども、たとえば最愛の人が死に直面するような緊迫した事態などが該当するだろう。かつては、私自身もその経験者の一人だった。

当時、主治医から「今の夫婦生活は、あと5日間しか保障できない。」と宣告されたシーンを今でもはっきり覚えている。私は自分がやってきたそれまでの勉強法や生き方では、逆立ちしても歯が立たぬ相手に遭遇したものと観念した。すぐさま別世界に答えを求め、なげなしの時間を稼ぎ出すべく、それこそ魔法やまじないの類にまで何でも手を染めてみた。こんなとき、頼りにできるのは人類共有の知的リソースたる「本」である。

結局、真言密教の延命法で21の縁数、私たちの場合、それは21ヶ月（持てる“徳”に応じて長短は21年から21時間まであり得る）の時間が稼げたが、その枠内にできたことと言えば、妊娠と授乳期間を確保しただけであり結局、「母のない子」を一人、生み出す結末に終わってしまった。

それから「なぜ彼女が若くしてこの世を去らなければならなかったのか」という命題に対する答えを探し求めて、海外への旅が始まる。表向きは時に技術移転のための国際協力事業であったり、遺伝子工学を学ぶための海外留学であるとか海外に生活拠点を求めるための経済移民だったりしたが、伏せられていたホンネ部分ではたぶん先の問いに対する答えを探し求めていたのだろうと、今なら私はそう述懐する。

仕切り直して東京都を辞め、新しい家族を伴ったタイ王国や英国では摩訶不思議な体験をいっぱいした。

何と10年後に起こることを伝えるため私たち一行を100年間も待ち続ける一群の精霊が旅先にいることまで知った（うち一人は研究者でその助言が的中したのは見事だが、翌朝の研究所訪問の前

夜に一睡もできず参った）。このような体験は恐らく戦後、不思議世界を完全否定してしまった日本の国内では到底、無理であったと思う（タイでも英国でも超自然現象をむげに否定はしないし、生命現象だって日々、不可解なことだらけだ）。

しかもその頃には「本」の形になった答えなど、まだ世の中に出ていなかった。だから生身の身体をもって異国で自ら経験を積み重ねて答えを探し求めるしか、私には術がなかったのだ。

日本へ帰ってきて、私が探し求めていた命題に対する解答を克明に記している「本」が世に出たことを知った。それは私とはまったく別のルートでたどり着いた知見であるが、その行き着いた先には驚くべきほど違いがなかった。それが、広島県は竹原市出身で呉の高校に学んだこともある福島大学教授の飯田史彦氏の著作（たとえば、2006年刊の『ツインソウルー死にゆく私が体験した奇跡』、CD付属、PHP研究所）である。

飯田史彦氏の肩書は経営学者ということになっているが、彼には不思議な内容を扱った著作がいっぱいあり、それは全てPHP研究所から刊行されている。人間の生死に係るカラクリを果たしてここまで記して良いのだろうかと思うむきもあるかも知れないが、もはや時代がそれを囑望しているということなのだろう。会社の命運を握る経営者らが読者層となっている可能性もあり、従来の智を越えた位置から人間の生き方や人生の枠組みに明快な意味づけを与えてくれる（それは各自の準備体験に応じてなのかも知れないが）。

そして私が呉で教員となった昨春、彼は私よりも若いが一足早く教壇を降り、前例のない社会活動を展開している。それが飯田史彦氏にとって生命を賭けた臨死体験の後に続く、新たな使命を担う冒険の始まりであるのなら、私が今ここにいる現状も次なる約束の地へと向かうための旅の続きなのかも知れない。

苦手な読書が趣味



環境都市工学分野 三村 陽一

本を読むことはあまり得意でない。本を読むと、どうしても眠くなる。読むのは遅いし、読解力に長けているわけでもない。書かれていた内容もすぐに忘れてしまう。したがって、読書をするのは「苦手」である。

思い返すとこのような傾向は、幼いころから変わっていない。本を読むことは苦手。文章を書くことも苦手であった。読書感想文に「感想」はなく、だらだらと書かれているのは、あらすじの概略の抜粋のようなもの。原稿用紙を埋めることだけでもう四苦八苦。日記に至っては「今日は〇〇をした。おもしろかったです」だけ。もっと本を読ませてください、と担任の先生からたびたび注意を受けていたのは私の母。中学・高校になっても苦手な科目は、断トツで国語。そんな私は、高校3年生のとき、迷わず理系コースを選択した。

時は過ぎて2005年。勤務していた設計コンサルタントを辞職し、母校の山口大学の大学院生になっていた私は、「苦手」な読書が「趣味」になっていた。

本でも読んでみるかと購入したのが「すべてがFになる」(森博嗣、講談社文庫)という推理小説。誰かに強制されたわけではないので、のんびりと1週間以上かけて読んだと記憶している。もちろん読書感想文を書く必要はない。作中のトリックに仰天し、ちりばめられた伏線の数々に嘆息した。こうなると推理小説の虜である。今でもよく読むのは推理小説である。しかし、歴史小説やエッセイなど、読むジャンルは徐々に広がっていった。

私が本を読み続けることができた要因は、いくつかあるように思う。もちろん非常に面白い本に出会ったことが大きい。だが、それだけではない。

そもそも読書は一人ででき、読もうと思えばすぐに始められ、いつでもやめられる。要は自分の都合によって、1分でも1時間でも1日でも自由に読書を楽しむことができる。また、費用もそれほど必要ない。本さえあればよい。古本屋や図書館を利用すれば、コストパフォーマンスはさらに向上する。気に入った本を再読する際のコストは

ゼロ。読んでもすぐに内容を忘れてしまう私の場合、気に入った推理小説を再読しても、同じトリックで何度も驚かされる。何ともお得である。

のんびりと読書を楽しんでいたが、ふとしたきっかけから、WEB上で本棚を作成できるサイトがあることを知った。読んだ本を登録すると、本がきれいに陳列される。これが楽しくてうれしくて仕方なかった。ブックリマンシールを集めていたときと同じ感覚で、ちょっとしたコレクションである。このWEB本棚(ブクログといいます)の存在が、私の読書熱をさらに加熱した。

2006年と2007年は、読了数が年間100冊を超えた。さすがに近頃は減ってきたが、それでも年間50冊程度は読んでいる。普段持ち歩いている鞆には必ず文庫本を入れている。トイレに行ったときに本がないと落ち着かないし、本を読まない寝つきも悪い。本屋を散策しているときつい買ってしまうので、購入したもののまだ読んでいない本が、家に50冊くらいある。これら積読本を早く読みたい。しかし、好きな作家の新作も続々と出版されるので、なかなか全部読み切れない。悩みはつきない(本当に悩んでいるわけではない)。本で読んだことが仕事の役に立ったか? 人格の形成に何か影響したか? 本を読むことによって、自分とは異なる考え方や新たな知識が得られたかもしれない。しかし、本を読んでいたときに他のことをしていたら、そこで別の経験を積んでいただろう。その経験のほうが、もしかしたら大事であったかもしれない。しかし、割と読書をしてきた今の私と、そうでない場合の私とを直接比較することはできない。したがって、読書の効果・影響を私自身がほとんど把握していないし、気にもしていない。相変わらず本を読むことは苦手である。文章を書くことも苦手なままである。この随想を執筆するのも一苦勞。

本を読んで何かを得たい、という考えが私にはない。単純に本を読むことを楽しんでいる。だからこそ、読書が「趣味」なのである。

テーマが拡大していく読書の楽しみ



建築学分野 泉 洋 輔

本に関する随想の依頼を受けた。初めての経験である。困った……。特にこれといって人に誇れるような読書歴を持っているわけではないからである。そこで、赤瀬川原平著「新解さんの謎」(文藝春秋)で話題となった新明解国語辞典(第四版・三省堂)で随筆・随想の意味を調べてみた。「随筆」：筆者の体験や見聞を題材に、感想をも交じえ記した文書。[現在は、新聞・雑誌から求められて掲載する、書き流しの肩の凝らない短章を指すことが多い]。また、「随想」：人生や社会の一断面について心に浮かんだ着想をテーマに、学問的な考察を加味してまとめた文章、とあった。書き流せばよいとある「随筆」の方針を採用することにした。

ちなみに、この新明解国語辞典を購入したきっかけは、十数年前に月刊誌・文藝春秋に掲載された「フシギなフシギな辞書の世界」を読んでからのことである。

現在、地球環境問題は、日本だけでなく世界中で関心を持たれているキーワードである。私がこれに興味を持ったのは、1987年に1年間NHKで放送された番組「地球大紀行」を見てからであるがその後ビデオも購入した。その第7回目のテーマが「恐竜の谷の大異変」であった。6500万年前に推定直径10kmの巨大隕石の衝突によって恐竜絶滅の科学的裏付けを持ったシナリオが紹介された(米国科学雑誌Scienceへの発表は1980年である)。この隕石衝突による地球環境の変化が恐竜絶滅への引き金となり、「核の冬」による環境変動と対比された。なお、衝突現場は1991年にメキシコ・ユカタン半島沖の海底と確認され、チチュルブ・クレータと呼ばれている。また、このシナリオを考えた研究グループの一人で地質学者のWalter Alvarezの著書の翻訳本「絶滅のクレーター T・レックス最後の日」(新評論)も刊行されている。映画でも隕石衝突を題材としたArmageddon, Deep Impactが上映されたが単なるSFとは思えないように感じた。実際1994年には木星にシューメーカー・レヴィ第9彗星の衝突が観測されているが、日本

ではNPO法人・日本スペースガード協会において小惑星・彗星の軌道の監視が行われている。6500万年前の衝突による地震マグニチュードは12と推定されており、現行の耐震設計で想定している地震荷重をはるかに上回る規模であり、対策不可能な状況である。

さて、地球環境問題の書籍を読んでいるうちに、惑星としての「地球」そのものの進化過程を知る必要があると思いついた。そこで、松井孝典氏の本を読むようになり、今では30冊の蔵書となっている。そこでは、地球を、物質とエネルギーがやり取りしながら有機的につながった1つのシステムとして捉え、地球の進化過程の歴史は、物質圏が分化(進化)する歴史であると説く。約1万年前に生物圏から人間圏が分化したとしている。さらに、新しい物質圏の分化は、それまでの地球システムの物質循環で決まる状態に汚染をもたらすとし、現在の地球環境問題は、この人間圏の活動が引き起こしたものである、という論理展開である。最近、北極海をおおう氷の面積の縮小に伴い、その周辺地域でのエネルギー資源開発が注目されている。一方でグリーンランド沖から始まるとされている海洋熱塩循環が、この氷縮小が原因で海水の塩分濃度を低下させることによって停止したとすれば、まさに映画Day After Tomorrowのような環境の激変が起こるのではないかと心配になってくる。Sustainable Developmentは果たして可能なのであろうか?というのが感想であるが、まず身近な節電・節水を心がけている。

これらの書籍を通して、環境考古学、秦始皇帝兵马俑発掘、ハッブル宇宙望遠鏡、ハワイ島マウナケア山頂に建設されたすばる望遠鏡、全地球凍結(スノーボールアース)、系外惑星系、火山、世界遺産、植物、水等々、興味が拡大している。このように1つのテーマの読書から、種々のテーマに拡大(拡散)していくところに、読書の面白さがあると改めて感じている次第である。

以上、本に関する随想の依頼の責をこの散文をもって果たさせていただくことにする。

ことばを楽しむ -詩と携帯メール-



建築学分野 佐々木 伸 子

この写真は私の研究室のドアに貼ってある行き先表示のカードです。何の写真か分かるでしょうか？

去年の初夏にガラスの器にかけた紫陽花です。丁度その頃、環境文学を研究している友人から、アメリカ・コロラド州にあるNaropa Universityの環境教育レポートが届きました。そのなかに書かれていた詩に魅かれ、自分が撮った写真とあわせてカードにしました。

丸いガラスの器の中の紫陽花はまるで青い地球の様です。その中に書かれた詩は、ティック・ニャット・ハンという、60年代のアメリカで平和運動に身を投じたベトナム出身の禅僧によるものです。この短いことばで、瞑想において深呼吸する時に感じる広い広い世界観を表現しています。

私は文学が得意でなく、逆に「なんのこっちゃら？」と理解できず苦手でした。しかし、友人が目をキラキラさせて自分の研究を語っているのを聞いていると読んでみたくなり、自然にその世界に入って行くことができました。合理性や論理性を重視した私の思考回路にゆとりや新たな世界観が生まれてきたのです。そして、表現方法としての「ことば」を意識するようになりました。

「詩」は読む人の状態に応じて理解や得られるものが異なりますが「論文」は誰が読んでも理解できる様に書かなければなりません。私の感覚とは対極に位置しているかと思っていたことが、自分の中に対極があることに気づきました。当たり前のことですが、「ことば」は論文にも詩にもなるのです。短歌や俳句も短いことばで強い想いを伝えることができます。

みなさんが普段使っている携帯メール。これもいわば短い文章や絵文字で気持ちを伝える詩的な要素を持っていますよね。ちょっとした語尾のいいまわしや絵文字で相手の気持ちを読み取ったり、相手への想いを伝えたりすることができます。

携帯メールを「詩」と思っている人はほとんど

いないと思いますが、携帯メールが含有する独特の「詩情」は感じているのでは？

すぐに返信をしなくても、慌てなくてもいいから自分の想いと「ことば」を大切にしてください。平安時代の人は短歌で、現代人は携帯メール！でことばに想いを込めて相手に送るのでしょうか。また、滅多に手に取ることはないと思いますが、詩集も一読の価値があります。

近代文学で室生犀星を研究している友人と金沢の犀星記念館に行った時に買った「動物詩集」には、蠅や蚊など小さな虫から動物や植物など身近な生き物の姿が目につくような詩がたくさんありました。ゲーリー・スナイダーの「Turtle Island (亀の島)」は難しいですが、人間と自然の有り様を考えさせられます。

長い小説は苦手という人は、短いことばを楽しんでみてください。

きっと世界が広がりますよ。

写真の詩を自分なりに訳してみてください。一応、苦手な人のために、訳を記しておきます。

息を吸って、私は肉体を静める

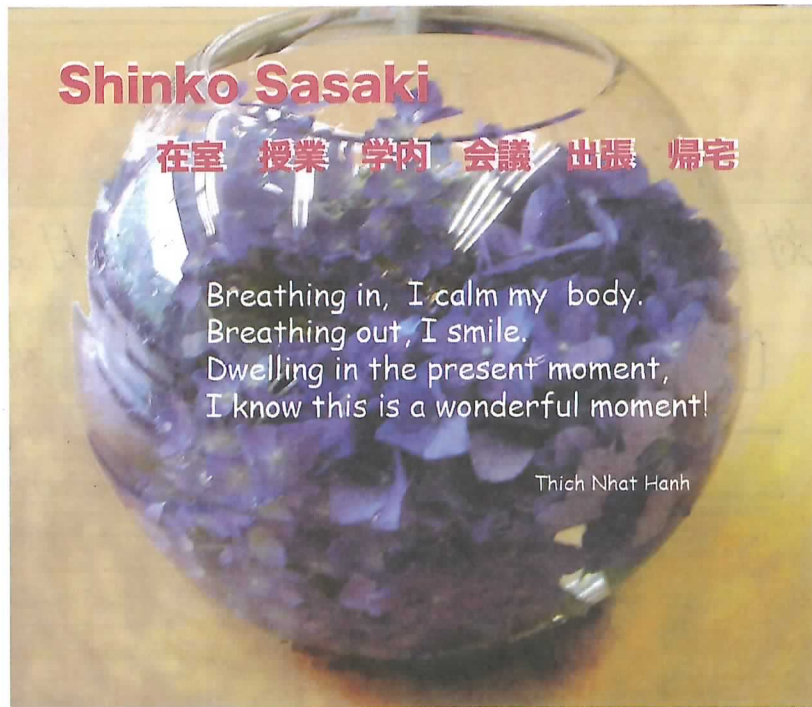
息を吐いて、私は微笑む。

いまこの瞬間に生きながら、

いまここにいるすばらしさを知るのである。

(高橋綾子訳)

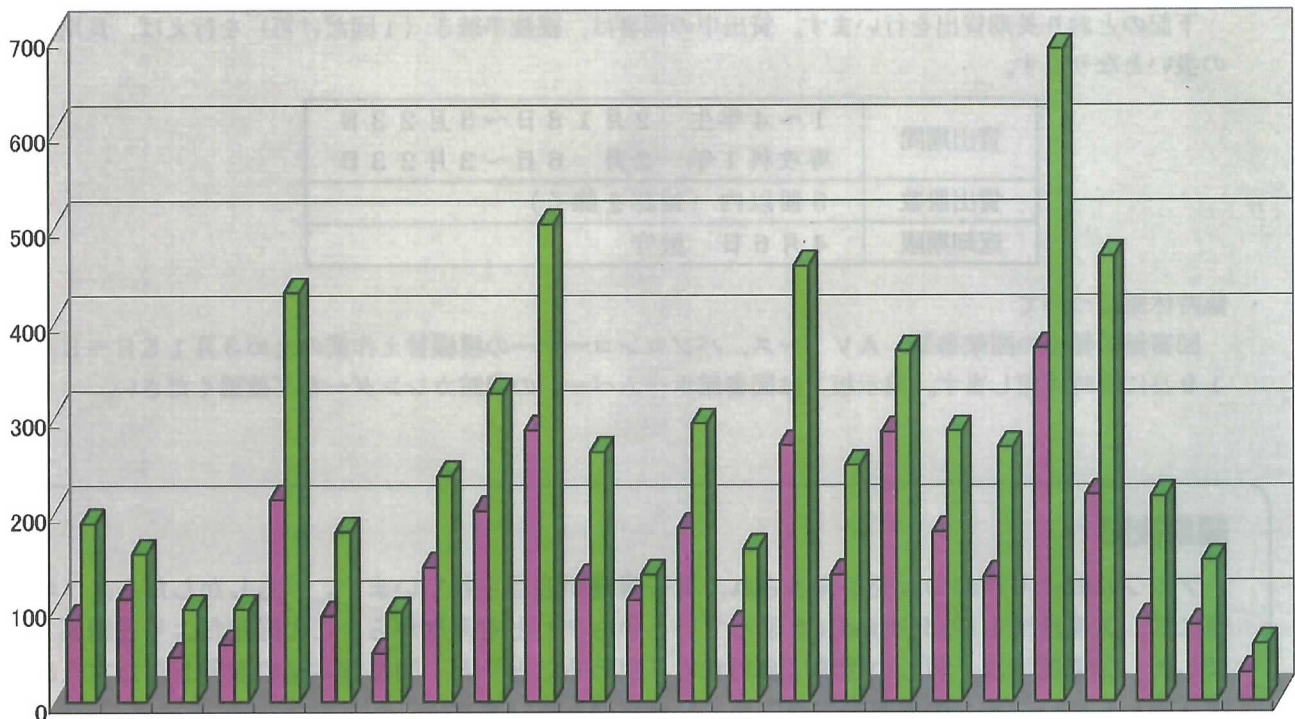
(Thich Nhat Hanh, Peace is Every Step: The Path of Mindfulness in Everyday Life, 10)



お知らせ

・平成20年度 図書館利用状況

■ 貸出人数
 ■ 貸出冊数



学科学年	M1	M2	M3	M4	M5	E1	E2	E3	E4	E5	C1	C2	C3	C4	C5	A1	A2	A3	A4	A5	専攻科機電		専攻科建設	
貸出人数	87	108	47	60	212	90	51	141	200	285	128	106	182	79	269	133	283	178	131	371	217	86	80	30
貸出冊数	187	155	97	97	430	178	94	237	324	502	262	133	292	160	458	248	368	284	267	686	468	215	148	60

貸出回数上位ベスト10

(調査対象期間: H21年4月1日～9月30日)



順位	書名
1位	大学編入試験問題数学/徹底演習
2位	はじめてのTOEIC Bridgeテスト
3位	TOEIC Bridge公式ガイド&問題集
4位	初挑戦のTOEIC TEST470点突破トレーニング
5位	SPIテストセンター問題集[完全版]
6位	理系の人々:うとうしいけど、憎めない
7位	TOEICテスト新公式問題集
8位	空想科学読本6
8位	私たちはこう言った!こう書いた!合格実例集
8位	イノセント・ゲリラの祝祭

お知らせ

- ・ 学年末休業中の長期貸出について

下記のとおり長期貸出を行います。貸出中の図書は、継続手続き（1回だけ可）を行えば、長期貸出の扱いとなります。

貸出期間	1～4年生 2月18日～3月23日 専攻科1年 2月6日～3月23日
貸出冊数	5冊以内（雑誌を除く）
返却期限	4月6日 厳守

- ・ 臨時休館について

図書館閲覧室の開架書架，AVブース，パソコンコーナーの様様替え作業のため3月15日～3月19日に臨時休館します。掲示板又は図書館ホームページの開館カレンダーをご確認ください。

編集後記

アップル社よりiPadの販売が発表され、電子書籍が注目されています。「もしかしたら、1年後には、図書館でもiPadやKindleを使っているかも？」と考えながら、この図書だよりを編集しました。図書館では、新しい環境に合わせて「変わること」と、図書館本来の役割を果たすために「変わらないこと」の両方を大切にしていきたいと思ひます。

今回も、多くの方々のご協力により「図書だより」を発行することができました。最後になりましたが、ここに、厚くお礼申し上げます。